

CONTENTS

WALTHER P38

新しい
軍用ピストルの
流れを創造した
ワルサーP38

Report by Ken Nozawa
図版解説 / 鈴木健太郎



004 第68回 **サイゴン物語** Saigon Memories
MACVがいたベトナム戦争「入口から出口まで」(17)

008 **ベトナムを遠く離れて——。**
silencer その3 文/小倉徹

042 **知られざる
プロフェッショナルたち**
ベトナムのオーストラリア陸軍訓練チーム

FULLCLIP

048 **スペックを超えるスペック**
機能と合理性を追求したバッグ作り

056 **SHARK SHOOTER LIVE-FIRE REPORT!**
**スプリングフィールドアーモリー
エシュロン** Report by Muneki Samejima

066 **ウェスタンアームズ新製品リポート**
Report by SHOTGUN MARCY

- エリート・オペレーター G10グリップVer.
- SVインフィニティ 10ポート・カスタム

071 **タナカ・ワークス新製品リポート**
Report by SHOTGUN MARCY

- S&W M49ボディーガード3インチ Ver.2

074 **トイガンニュース**
タナカ・ワークス
●S&W M49ボディーガード2インチ Ver.2

076 **Militaria Roundup!**
アメリカ軍 フライト・スーツ

082 **東京マルイ**
電動ガン+シリーズ第3弾 **G36C +**

087 **月刊 THE グリーンベレー
GREEN BERET**
特殊部隊CIF中隊特集 Part6 解説/DJちゅう

092 **新製品情報 COMBAT mono**
DJちゅうの

093 **GEARHEADS JUNCTION**
MilsimLite in 関東 Vol.02

098 **ニッポンのちからこぶ** 写真・文/菊池雅之
アイアンフィスト24

ボスゲリラ不屈のトイガン魂!
102 **サバゲ・マスカラ・コントラ・マスカラ!**

104 **シンサバゲ三等兵
祝! サバイバルゲームフィールド
PARADOX 10周年!**

COMBAT FRONT LINE

107 今月の中田焦点! KORE ESSENTIALS
EDCガンベルト

108 新作映画情報「無名」「殺人鬼の存在証明」
「トランスフェュージョン」

106 レアミリタリーテクノロジー

109 読者プレゼント & CIC

110 バックナンバー

111 次号予告&奥付



ミリタリースポッター

**Captain Erik Leitzel,
a B-2 Spirit pilot is the third
generation to carry
on the aviator legacy.**

Erik's father, Ben Leitzel (second from left in the group photo), flew the strategic bomber B-1 and completed 16 combat sorties. While serving at RAF Fairford, albeit at different times, both father and son continued their family tradition. Ben's father, Don Currie, was a pilot flying B-17s and belonged to the 401st Bomb Group during World War II. The photo shows Don standing in front of a B-17 parked on the flight line at RAF Deenethorpe.

エリック・ライツェル大尉、B-2 スピリットのパイロットは、エビエーターのレガシーをつなぐ3代目だ。彼の父ベン・ライツェル(集合写真の左から2番目)は、戦略爆撃機B-1を飛ばし16回の作戦飛行に参加した。親子は時期は違うが、同じRAFフェアフォード基地で任務に就いていた。ベンの父ドン・キューリーは、第2次世界大戦中に第401爆撃グループに所属し、B-17を飛ばすパイロットだった。写真はRAFディーンソープ基地のフライトラインに駐機するB-17前にいるくわスタバコのドン。

Photo/USAF & Courtesy Photos





WALTHER 新しい 軍用ピストルの 流れを創造した ワルサーP38

P38

第一次大戦で華々しいデビューを飾ったオートマチックピストル。この新兵器は装弾数の増加というメリットをもたらした一方で安全を確保したまま臨戦態勢に移れないというデメリットもあった。そして第二次大戦前夜、ドイツでこの問題を解決する新型オートマチックピストルが生まれる。その名をワルサーP38という。

Report by KEN NOZAWA

図版解説/鈴木健太郎 photo/U.S.ARMY, Bundesarchiv, WPP Archive Illustration/M.kelly

WALTHER P38



P38の射撃訓練を行う武装親衛隊の兵士。P08よりも高い機能性と信頼性を持つP38は戦地の部隊ですぐに好評を博した。

ここでルガーP08の作動原理だが、弾丸が発射される時、正確には撃発が起こり弾丸が銃身内を前進するとき、銃身とトグルは後退を始める。その際、銃身とトグルとはロックされており、一緒に後退することになる。少し後退するとトグルはフレームの傾斜部分によって押し上げられ、ロックは解除されてトグルは折れ曲がり、横から見ると三角形になる。そのトグルは前進する際にマガジン最上段の実包を薬室へと送り込むわけだ。

同様にM1911の作動原理だが、弾丸が銃身内を前進するとき、銃身とスライドは後退を始める。その際、銃身とスライドはロックされているため、一緒に後退する。少し後退すると銃身はカムの回転によって後端が下がるため、スライドと銃身とのロックは解除され、スライドのみが後退を続ける。その後、後退しきったスライドは前進を始めるが、その際にマガジン最上段の実包を薬室へと送り込むのだ。

文章にすると分かりづらくなってしまいが、それら二機種は上記の運動をする。パーツの名称が異なるだけで基本的には同じ運動ではあるが、大きく異なるのは運動するパーツの重量だ。トグルとスライドの重量が大きく違うのだ。

ジョン・ブローニングが設計したM1911は、後の多くのピストル開発に影響を与えているが、その影響のひとつが「スライド」の採用にある。もちろんスライド採用によるメリッ

ト、デメリットはあるものの、基本的にはスライド採用はピストル設計においてプラスが多い。スライドというパーツはピストル本体の重量に対して重く、M1911で見ると約40%がスライド重量となっている。そして、スライドを重くするとピストルの作動性は高まり、反動のピークは下がり、耐久性が上がることになる。デメリットとしてはスライドの往復時間が延びることだが、1秒間に3発、4発(以上)という連射をするのであれば問題にはならない。スピード射撃競技に用いられる、いわゆるレースガンでは、スライドの肉抜きが見られるものもあるが、あれは、スライドの往復時間の短縮が狙いにある。

ルガーP08の弾丸発射時のトグルの動きだが、後退を始め、それが後退しきって止まるまでの時間を「1」とすると、そこから前進し始め、実包を薬室に送り込んで閉鎖するまでの時間は「2」だ。対してM1911の場合、前者を同じく「1」とすると後者は「4」もしくは「4.5」になる。後退(開放)するよりも前進(閉鎖)する方が、より多くの時間を要するのは、後退は弾丸発射の反作用で発生するのに対し、前進はリターンスプリングの力で行なわれるためである。もちろん、実包を薬室に送り込むという仕事も加わるからである。

現代のピストルを見ると、人気のSIG P220番台、ベレッタ92シリーズ、グロック・ピストルなどを見ると、どれもスライドと呼ばれ

るパーツがある。先述しているとおり、これはスライドを設けることで、重量のあるパーツを用いることで、ピストルの設計を容易にしている側面がある。

ここで話をルガーP08に戻そう。

スライドを持たないルガーP08にもメリットはある。全体重量を抑えることや発射速度を高められることだ。第一次世界大戦時、塹壕戦用としてフルオート射撃のできるルガーP08モデルが試作されたが、発射速度は毎分1,200発と高かったとされている。コルト社が試作したM1911のフルオート射撃モデルは800~900発であり、レートは抑えられている。まったく別の二機種の発射速度のみを比較してもあまり意味はないが、そこでの差は、スライドの有無が関係していることは間違いない。ただし追記すると、発射速度は高いほど良いとは言えず、ケースバイケースで求められる(最適)レートは違ってくる。

さて。ルガーP08に足りなかったのは、ピストルとしての安定性、安心感、そして耐久性となる。作動機構は機械としては面白く、優れている部分もあるが、こと「銃器」として観てみると、不安定さと弱さがあったといえる。反動エネルギーの一部をスライドに置き換えられないため、ルガーP08ではどうしても本体に無理が掛かるのだ。

ちなみに、1930年代初頭のルガーP08の価



(上奥) 降伏したドイツ陸軍兵士からP38を押し、得意げな笑みを浮かべるアメリカ軍兵士。P38は戦場土産としてP08に負けない人気を誇り、かなりの数がアメリカに持ち去られた。(上)東部戦線で戦う武装親衛隊の兵士がP38を構える。ドイツ軍の敗色が濃くなると、アメリカ軍だけでなくソ連軍でもP38の愛好者が増えるとともに、戦争終結後は余剰となったP38さまざまな国の軍や警察、テロ組織に流れ込んだ。

格は約80マルクでドル換算すると約19ドルだ。対してコルトM1911のそれは約25ドルであったようだ。各国の物価や状況などが加味すると、ルガーP08が高コストであったとは言いがたい。もっとも、ドイツにはハイパーインフレが2度発生しており、1929年には世界恐慌もあったため、価格計算、物価換算も難しく、比較し難いといった事情はある。

結局のところ、ドイツ国防軍は次期制式採用ピストルに何を求めたのかというと、話は最初に戻るが、生産性やコストや信頼性となる。価格を見ると、1940年当時のルガーP08は約80マルクなのに対し、ワルサーP38は約60マルクであったとされる。月産数もルガーP08は5,000~8,000挺であったものが、ワルサーP38は10,000挺前後とされており、生産性の改善もあったようだ。もっとも、1940年当時はルガーP08からワルサーP38への切り替え次期であり、先述しているとおり、月産数は工場規模によって異なるため単純比較はできないのだが、生産性が高められたのは事実である。

軍用ピストルの在り方の変化 生産性と安全性という新基準

次期軍用ピストルの開発が求められワルサーP38が誕生するが、その流れは前出のワルサーPPから始まることとなる。

1920年代の終わりから1930年代初めに、ルガーP08に替わる新たな軍用ピストルが求め

られると、その開発メーカーとしてワルサー社に白羽の矢が立てられた。1929年に発売のワルサーPP。続いて1931年に発売のワルサーPPKという2機種の完成度の高さが目を引き、軍からの要請が伝えられたのだ。もちろん当時のワルサー社以外にもDWMやマウザーといった銃器メーカーはあったのだが、第一次世界大戦での敗戦により、軍用火器の開発が制限されていたドイツでは、過去に軍用火器を開発・製造していた企業に対し、多くの規制がかけられていたという事情があった。対してワルサー社は民間向けのスポーツ射撃銃や狩猟用ライフルの製造が中心であったため、ほとんど規制を受けずに事業を継続できていたのだ。創業から長らく、民間向けの仕事を続けてきたことがワルサー社に幸運をもたらした。

1934年、ワルサー社は9mmパラベラム弾を使用するよう大型化されたワルサーPPモデルのMP (Militarische Pistole: ミリテューリッシュェ・ピストーレ: 軍用拳銃) を軍に提出した。これは想像しやすいが、ワルサーPPはシンプル・ブローバック方式を採用した半自動

ピストルであり、スライドを含めサイズ全体を大型化し、リコイル・スプリングも強化したのだが、安全性と操作性の両面での問題をMPは残しており、すぐさま改良が求められた。ミリタリーファン、そしてガンファンにとっては常識だが、9mmルガー弾(以上)の威力の口径では、特殊な機構を持つピストルを省き、シンプル・ブローバックでの安全作動は保障されない。高威力の弾丸発射はスライド後退を早め、薬室内の圧力が下がる前に薬莢を引き出し、破損とガス放出の恐れがあるからだ。もちろん、極端にスライドを大型化、重量化し、リコイル・スプリングを強化すれば安全作動も可能だが、そうすると、ピストルと呼べない大きさ、重さになり、かつスライド操作が困難になる。

サブマシンガンが9mmルガー弾口径でありながらシンプル・ブローバック機構で作動させられるのは、ボルトが大きく重いことと、後退ストロークがピストルの2倍、3倍と長いからに他ならない。話を戻そう。



知られざる プロフェッショナルたち ベトナムのオーストラリア陸軍訓練チーム

文／鈴木健太郎 写真／AUSTRALIAN WAR MEMORIAL, WPPアーカイブ



オーストラリア陸軍訓練チームの部隊章。クロスボウとブーメラン、そしてスクロールを組み合わせたデザインで、スクロールには彼らのモットー、「PERSEVERE (耐えつゝ通す)」が記されている。AATTVではこの部隊章のほかにシールドのないヘッドギア用バッジも使用した。



落下傘降下の際に行う受け身の方法を伝授するAATTVの隊員。学んでいるのはCIDGの隊員を抽出して作られた機動部隊、マイクフォース (MIKE FORCE、MOBILE STRIKE FORCEの略称) に所属する訓練生で、タイガーストライプ迷彩服とオリーブグリーン製の戦闘服が混用されているのが興味深い。



(上) マイクフォースの訓練生とともにウォーミングアップを行うAATTVの隊員。CIDGおよびマイクフォースの訓練にあたったAATTVの隊員はこの任務の中心的存在であったアメリカ陸軍特殊部隊との協調を示すためか彼らと同じグリーンベレーを着用した。(右) (下) 訓練用具から飛び降りるマイクフォースの訓練生を見守るAATTVの隊員。左胸に見えているのはおそらくマイクフォースの部隊章バッジである。



(右) (下) マイクフォースの訓練生に助言を与えるAATTVの隊員たち。どちらもジャングルファティーグを着用し、手を組みながら語りかける隊員は袖にAATTVの部隊章とオーストラリア軍の空挺章を付けている。さらにベレーにはアメリカ陸軍第5特殊部隊グループを示すフラッシュの上にAATTVのバッジを重ねて付けられている。(右下) 南ベトナム軍部隊の訓練を行うAATTVの隊員たち。右の隊員が被っているのはオーストラリア軍のヘッドギアとして19世紀から用いられているフェルト帽、通称スローチハットで、通常は折り曲げたつばに部隊章を付けた。



ベトナム オーストラリア陸軍訓練チーム(Australian Army Training Team Vietnam-略称AATTV)はベトナムに派遣されたオーストラリア軍の組織の中で最も早い1962年8月

から活動を始め、当初の規模は30人と非常に小規模だったがほぼ全員がマラヤ動乱において対ゲリラ戦に従事し、コマンド部隊あるいはSASに所属する者もいるなど経験と技能

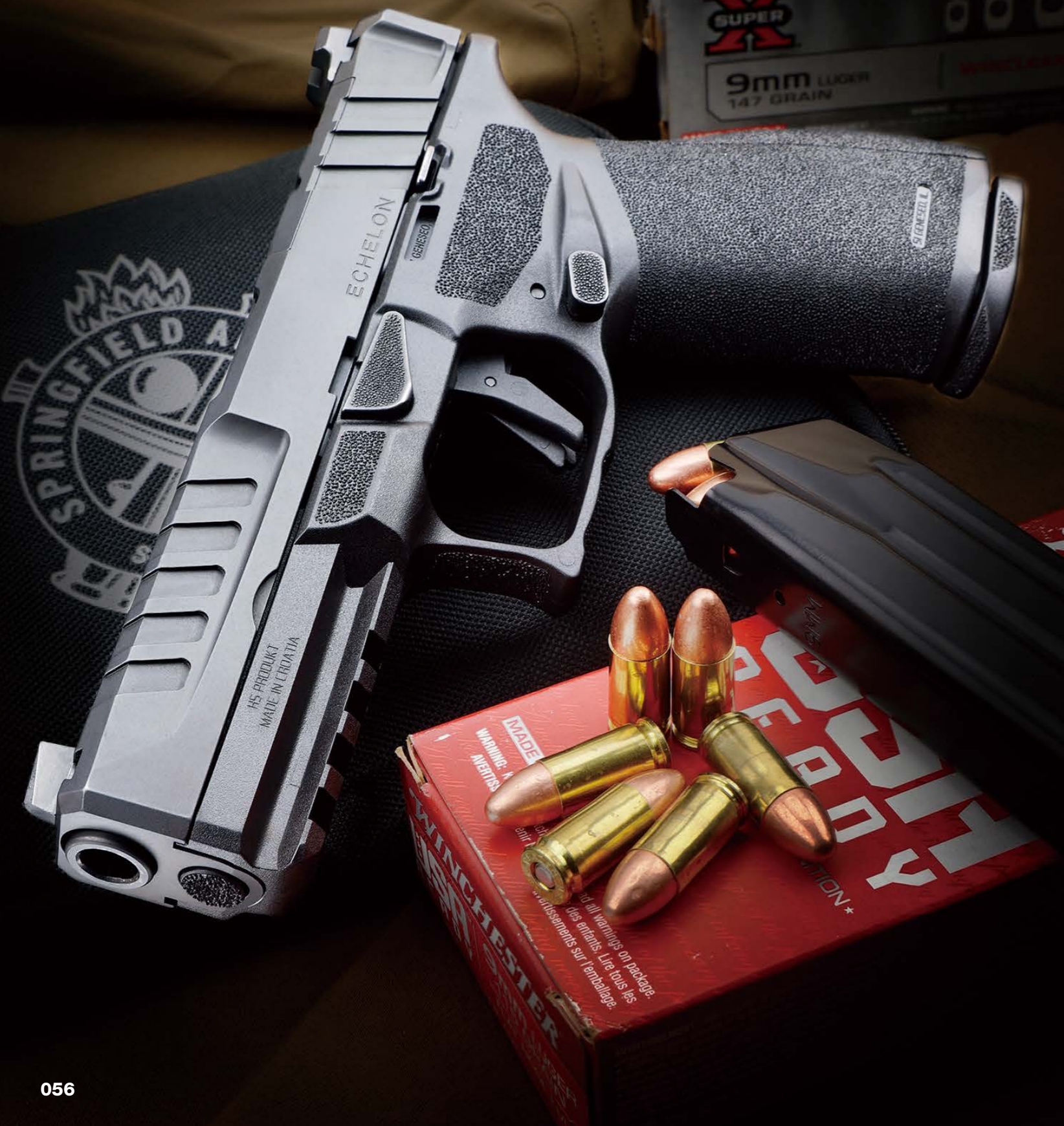
に関しては十分な裏打ちがあった。戦争が本格化するとAATTVもその規模を拡大させるが、最盛期でも人員数は200に過ぎず、アメリカ軍の軍事顧問に比べると驚くほどの少人数であ

りながら南ベトナム軍や民兵部隊、通称CIDGの訓練だけでなく一部は戦闘にも直接加わり、4人のAATTV隊員が英連邦最高位の勲章であるヴィクトリア十字章を授与されている。



Springfield Armory Echelon

2023夏——。スプリングフィールド・アーモリー社は、完全新規のニューモデルを発表した。3年以上の開発期間を掛け、ダンプistolに求められる全ての要素を盛り込んで登場したこの新Pistolは同社の自信作だ。その新モデルの実力を鮫島宗貴氏が徹底レポート!



Springfield Armory Echelon
●口径:9×19mm ●全長:200mm
●重量:758g ●装弾数:17発
●価格:679.00ドル

スプリングフィールド・アーモリー社のハンドガン・ラインナップ

スプリングフィールド・アーモリー社と聞いて、多くの人が思い浮かべるのは1911シリーズだろう。最近ではクロアチアのHSプロダクト社が製造したHS2000をオリジナルとし、アメリカでの販売権を所有しているXD/XDMシリーズが同社のハンドガン・ラインナップの主力製品だ。これらに加えて、新モデルとなるEchelon (エシュロン) が登場した。エシュロンはシリーズ化が期待されており、今後のスプリングフィールド・アーモリー社の顔となる可能性があるモデルだ。

Echelonとは?

スプリングフィールド・アーモリー社が自信を持って送り出す新モデル名は、「Echelon (エシュロン)」と名付けられた。エシュロンとは、古

代ギリシャの戦いにおいて、諦めるという選択肢を持たずに戦いを続けた戦士たちが開発した陣形であり、今日においても戦闘で使用されるエシュロン・フォーメーション (隊形) を意味している。その戦士たちのスピリットにあやかろうというのが名前の由来だ。同社の広告塔であり、アクション・シューティング界の伝説であるロブ・リーサム氏も開発に携わっており、モダン・Pistolに求められる“ありとあらゆる要素”を取り込み、銃の開発と生産はXD/XDMシリーズと同じくHSプロダクト社が行なっている。

第一印象

エシュロンを手にした時の僕の第一印象は「カスタム・グロック」だ (こう表現するとスプリングフィールド・アーモリー社の関係者は苦い顔をするかもしれないが……)。スライドのスリット、グリップのテキスチャー等、過去にどこかで見たような印象を受けた。しかし、これは決して悪い意味ではなく、ファクター出荷状態の銃でそのような外観を持つ銃はとても魅力的だ。近年、映画『ジョン・ウィック』シリーズへの露出で知名度を一気に上げたTTI社もグロックにカスタムを施しているが、そのイメージに近いものをエシュロンからは感じる。大き違いはその価格。エシュロンの価格はTTI社のカス

タム・モデルの半額程度という点だ。高級カスタムの外観を持ちながら、エシュロンの価格は約670ドル程度となり、コストパフォーマンスは最高だ。もちろん外観だけでなく、内部も最新のトレンドを取り込んでいる。特にCOG (セントラル・オペレーティング・グループ) と呼ばれるステンレス・シャーシを使用した機関部が、ユニットとしてグリップ・モジュールから取り外し可能なデザインは、SIG P320シリーズでも見られる最新の構造といえる。トイガンで育った僕からすれば、東京マルイのガスブローバックでも似たような

構造を目にした。この構造のメリットは、グリップ・モジュールを様々なサイズ、バリエーションに容易に交換出来る点だ。機関部が「銃」として書類上扱われる為、1挺購入すれば、後は安価なグリップ・モジュールを別途購入して、様々なバリエーションの展開が出来る。グリップ・モジュールに限らず、スライドやバレルは、購入の際に銃としての書類手続きが必要ないので、それこそひ



装弾数は17発。他社のライバルと比較しても引けを取らない装弾数だ。他にエクステンション付きの20連マガジンもオプションとして用意されている。

ELITE OPERATOR

G10 Grip Ver. *and*

SV INFINITY

10PORT CUSTOM



WESTERN ARMS

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
 西ウエスタン アームズ 03-3407-5922
<http://www.wa-gunnet.co.jp>



エリートオペレーター
 G10グリップバージョン
 ●全長:約220mm ●銃身長:114mm
 ●重量:約900g ●装弾数:23+1発
 ●価格:5万2,800円 ●絶賛発売中!!

リアルな重量とウエイト・バランスに貢献するメタル・チャンパーカバーは、SAIタイプの.45刻印。後部にチャンパーへの装弾を確認するインジケーター・ウインドウが設けられている。



トリガーはトライアングル・ホルのマッチ・タイプ。トラベル・スクリューを内蔵するロング・サイズだ。

グリップ・パネル左側には、マガジン・リリース・ボタンへのスピーディなアクセスをサポートするスラップ加工。ナロー・タイプのマガジン・ウェルが素早いマガジン・チェンジを可能にする。

精度の高い機械加工を駆使して再現されたベーシック・ラインのM1911タクティカル・カスタム

今月ウエスタン アームズ (以下、WA) がリリースする新製品は、M1911系のタクティカル・カスタムが2機種。伝統的なシングル・スタックの高精度クローン、スプリングフィールド・アーモリー・Inc (以下、SAI) の「エリート・オペレーター」と、1980年代に登場して一大センセーションを巻き起こし、現在もオフィシャル、コマーシャルを問わず人気の高いハイ・キャパシティ・モデル、SVインフィニティ6インチをベースにした「10ポート・カスタム」だ。どちらも、これまで趣向を凝らした様々なカスタムアップが施されてきたモデル。ベーシックなセミオートとして定着している近代型M1911をテーマにした最新バリエーションだ。

アメリカが独立を宣言した翌年、1777年にマサチューセッツ州スプリ

ングフィールドに設立された公営造兵工廠 (スプリングフィールド・アーモリー) は、1968年に長い歴史を閉じた。その名前を引き継いだ民間企業がSAI。1974年に設立され、米軍の制式採用ライフルだったM14を民間仕様に変更したM1Aライフルを中心に生産を始めた。軍用として生産されていたM14に比べて精度が高く、ハンティングや競技用として活躍したM1Aは、SAIの名声を定着させ、その後M1ガーランド、AR15、ボルト・アクションなど、数多くの高精度ライフルを生産してきた。

M1911の patents が切れた1990年代半ばから、高い技術力をバックボーンにした高精度クローンを製作。M1911のベーシックなシルエットを継承するM1911A1ミル・スペック、コマンダー・サイズのチャンピオン、

コンパクト・カスタムのV10や金属一体型フレームのハイ・キャパシティ・シリーズなど、精度の高い多数のM1911カスタムが注目を浴びた。中でも、大きな話題となったのがFBIに制式採用されたビューロー・モデル (TRP)。これ以後、米海兵関係もSAIのM1911 (MEUビストル、マーサックなど) を採用するなど、競技、コマーシャルを中心としたSAIガバメントは、オフィシャル・モデルの分野でも信頼性を獲得して現在に至っている。

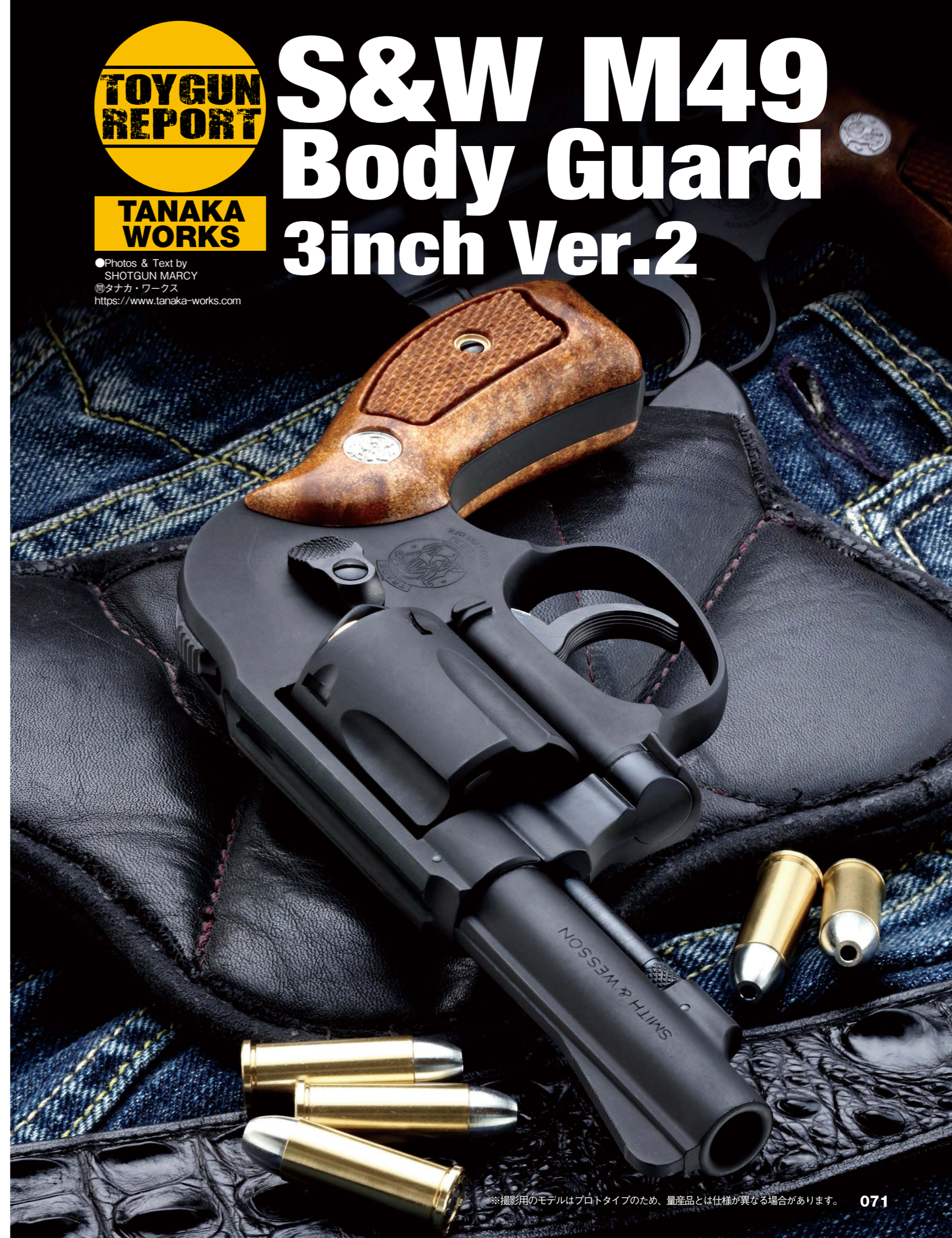


**TOYGUN
REPORT**

**TANAKA
WORKS**

●Photos & Text by
SHOTGUN MARCY
@タナカ・ワークス
<https://www.tanaka-works.com>

S&W M49 Body Guard 3inch Ver.2



※撮影用のモデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様異なる場合があります。



Militaria Roundup!

アメリカ軍 フライト・スーツ

フライトジャケットに比べ紹介される機会は少ないが、飛行服の主流を占めるフライト・スーツ。以前にアメリカ空軍の各種スーツを紹介したが、今回は現在アメリカ全軍で広く使用されているCWU-27/Pと、その採用前に海軍が使用したフライト・スーツを紹介しよう。

解説/菊月俊之 写真/青木健格

撮影協力/MASH ☎06-6567-3312 <http://www.mash-japan.co.jp> 中田商店 ☎03-3823-8577 <https://www.nakatashoten.com>

海軍服装規定に見るフライト・スーツ

各国軍隊はユニフォームの着用に関し規定を定めているが、その内容について言及されることは少ない。そこで今回は現行のアメリカ海軍服装規定によるフライト・スーツに目を向けてみよう。海軍はフライト・スーツを航空機搭乗員 (Aircrew) が飛行任務または飛行関連業見に就く際に着用するものとし、搭乗員以外の支援業務担当、整備員には着用が認められない。

フライト・スーツは勤務時だけでなく通勤時と業務に関連した立ち寄りでの着用も認められており、規定では立ち寄り先に保育所、ガソリンスタンド、基地外での買い物、銀行、食事が含まれている。ただしフライト・スーツを着ての飲酒は基地内でも禁止。なお首都圏 (NCR) で通勤時の立ち寄りが認められるのは急用のみで、一般的用事は認められていない。

フライト・スーツは清潔でよく手入れされていることが求められ、袖は完全に伸ばした状態で、袖口をベルクロで閉じる。飛行任務に従事していない場合は袖を最大2回外側に巻き上げて着用できる。そして着用時にはスライド・ファスナーを閉じ、左肩ペン・ポケットのフラップも閉じるように規定されている。

海軍フライト・スーツの関連アイテム

フライト・スーツに着用するヘッドギアは、将校と兵曹長 (E-7~9) が徽章付きカーキ・ギャリソン・キャップまたはボール・キャップ (Command/Navy Ball Cap)。兵と兵曹 (E-1~E-6) は徽章付き黒いギャリソン・キャップを着用し、ボール・キャップはオプションとなる。

ブーツは正規の黒革製フライト・ブーツを着用。これ以外に認可された黒、茶色、またはタンのブーツも着用できるが、靴と靴紐の色は一致させる。またタンのブーツ着用が認められるのは兵曹長以上 (E-7~) とされる。靴下はコットン100%、ナイロン100%または海軍航空システムコマンド (NAVAIRSYSCOM) が認めたもので、色はロゴやストライブのないセージ・グリーンまたは白と規定されている。

海軍フライト・スーツの徽章

階級章を除くすべての徽章 (服装規定では“ロゴ (Logos)”と記載) はフック&パイル (ベルクロ) 式で、セージ・グリーンのスーツはグリーンまたは黒のフック&パイル、タン・フライト・スーツはタンのフック&パイルを使用。パイル側をスーツに縫い付ける糸はスーツの色と一致させる。

階級章は将校が刺繍または縫い付け式の布製で、袖と肩の縫い合わせから5/8in (約16mm) の位置に着用。下士官階級章はスーツに着用せず、ネームタブに階級名を記入する。ネームタブは黒または茶色の革製。あるいはスコードロン・カラー (飛行隊色) で刺繍された布製で、サイズは2×4in (約5×10cm)。タブ上側にはエヴィエーター章などの航空徽章を配し、下側にファーストネーム、ミドルネーム (イニシャル)、そしてラストネームをブロック体で記入。ネーム・アクセント (“デューク”等の愛称のことらしい) の使用も可能。ピレット・タイトル (Billet title/地位を表す称号) の表示は選択式とされている。

ネームタブ着用位置はスーツの左胸ポケットと袖と肩の縫い合わせの中間。右胸には部隊章 (Command logos) を着用し、位置は左胸のネームタブに準じる。部隊章のサイズは3.5in (約9cm) を超えてはならない。左袖には星条旗、右袖には海軍兵器学校 (ウェポン・スクール) のバッヂを着用するが、後者は着用が認められている場合のみ。位置は肩と袖の縫い合わせから1in (約2.5cm) で、肩のアーチの中心に合わせる。



USS ハリー S. トルーマン (CVN-75) からの発艦を前に打ち合わせを行なう第32戦闘攻撃飛行隊“スWORDメン”(VFA-32 Swordmen) 所属F/A-18Fスーパー・ホーネットのクルー。彼らが着用しているのがCWU-27/Pスーツで、左大腿部にはベルクロを追加するアレンジが施されている。2007年の撮影。(Photo:U.S. NAVY)



ネームタグ

海軍フライト・スーツとフライトジャケットに着用するネームタグは革製と布製の2種類。写真の革製は茶革に金の箔押しをしたタイプで、階級名は省略されている。布製ネームタグの色はスコードロン・カラーを使用。デザインは使用機の垂直尾翼のマーキングが用いられている。布製ネームタグは第151戦闘攻撃飛行隊 (VFA-151) “ビジランティーズ”のもの。(撮影協力:中田商店/P-915 VFA-151 パイロットウイング/価格1000円)



CWU-27P フライヤーズ・カバーオール COVERALLS. FLYERS CWU-27P

CWU-27/PはK-2B フライング・スーツ (カバーオール) の後継モデルとして1969年に採用。温暖地域 (Warm-temperature Zone) でアウターとして着用される飛行服で、採用当初はアイテム名が“Coverall, Flyers, men, Summer, Fire Resistant”と、「夏用」の表記が入っていた。ちなみに“CWU-O/P”の型式は1950年代後半に導入されており、“CWU”は“Clothing Warms Unit”の略。“P”は“Personal Use”の略で、「個人用温暖衣料ユニット」くらいの意味。

アメリカ空軍の飛行服は服装規定AFI36-2039で①フライング・デューティー・ユニフォーム (Flying Duty Uniform/飛行任務服。FDUと略称)、②アウター・ガメント (Outer Garment/上着) に大別されている。今回紹介するCWU-27/Pは①のFDUに区分され、色がタンのパージョンはDFDU (頭の“D”はDesert (砂漠) の略) として区別されている。



空軍、海軍航空隊だけでなく陸軍航空部隊や特殊部隊など多くの部門で広く着用されているCWU-27/P。スベックMIL-83141の制定は1969年11月11日なので調達開始は70年からと思われる。スーツの素材は非溶解性のアラミド繊維100%だったが、現在は耐熱性と防炎性に優れたメタ系アラミド繊維92%、パラ系アラミド繊維5%、導電性繊維3%の混紡に変更。今回紹介するのはFDUと略称されるセージ・グリーンタイプの2020年の発注分だ。(撮影協力: MASH/00-09-4510 米軍最新CWU27/P フライヤーズ・カバーオール/価格3万8000円)

脇の通気口と袖口

袖はカフスの付かない筒袖。前モデルのK-2Bではスナップ・ファスナーとタブで袖口を閉じたが、CWU-27/Pではフック&パイル・ファスナー (ベルクロ) に変更された。脇の下には着用時の蒸れを防止するための通気口が設けられている。

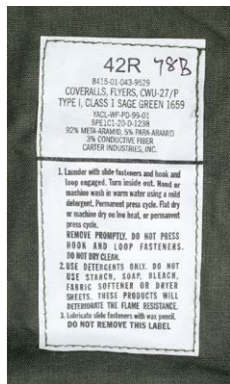
ペン&ベンシル・ポケット

左袖上腕にはアメリカ軍の飛行服ではおなじみのペン&ベンシル・ポケットが付けられており、ボールペンまたは鉛筆2本と、小物 (以前はタバコが一般的) を収納する。採用当初はフラップが付いていなかったが、途中からポケット全面を覆うフラップが追加されている。空軍服装規定にはフラップの切除に関し、「空軍主要軍団 (MAJOCOM) による補充 (Supplement) がある場合、およびフラップが飛行時の安全面で懸念がある場合を除き禁止」とある。



ラベル

ラベルの表記は洗濯に関する注意がメイン。「洗濯時はスライド・ファスナーとフック&ループ・ファスナー (ベルクロ) を閉じる。手またはアイロン不要設定の洗濯機で洗い、液温は最大40°Cで中性洗剤を使用。乾燥は平干し、または乾燥機を低温設定で使用。」。「洗濯には洗剤のみを使用し、洗剤類、石鹼、漂白剤、柔軟剤または柔軟剤シートは耐火性を劣化させるので使用しない。乾燥後はすぐに乾燥機から出して畳むか、ハンガーに掛けること。フック&ループ・ファスナー (ベルクロ) はプレスしない。ドライクリーニングは禁止。ワックスペンでスライド・ファスナーの動きを滑らかにせよ。」とある。



襟元と前立て

襟は角の丸いラウンド・カラーで、海軍の飛行服によく見られるデザイン。前モデルK-2Bの初期モデルは襟先端が尖ったデザインだったが、後期型からラウンド・カラーに変更された。左前身頃には前立てが付くが、フライト・スーツには付かないのが一般的で、前モデルのK-2Bにも付いていない。



K-2B フライング・カバーオール

第2次大戦中の1944年に採用されたK-1 フライング・スーツの後継モデルで、1949年頃に採用。52年に色がエアフォース・ブルーのK-2Aとなり、53年には色がセージ・グリーンのK-2Bとなった。また、名称も60年代中頃から“フライング・カバーオール”に変更されている。ベトナム戦争中 (1962~75年) に広く使用され、最終的に1969年まで生産された。写真のスーツは65年発注分。(撮影協力:中田商店)



電動ガン+シリーズ第3弾

G36C Plus+

先進の高性能FET回路「PLUSシステム」を搭載した
“5シリーズ目 電動G36C”



MTD (マルイタクティカルドットサイトをローマウントで載せると「アブソリュート・コウイットネス (=同一照準線)」に！

- MTD (マルイタクティカルドットサイト) 21,780円
- ショートフォアグリップ ブラック 2,420円
- G36C用 50連スベアマガジン 3,080円



G36C PLUS+

- 全長: 500mm / 718mm (ストック展開時)
- 重量: 2,885g (※チークアウター、空マガジン、ニッケル水素バッテリー含む)
- インナーバレル長: 247mm
- 動力源: MS・Li-Poバッテリー (7.4V 1,500mAh 35C) スタンダード・タイプ or 8.4Vニッケル水素1300mAhミニSバッテリー
- 装弾数: 50発
- 可変HOP-UP搭載、PLUSシステム (FET回路) 搭載
- 価格43,780円 好評発売中!

電動ガンPlus+シリーズにはメッキコーティング・セクターギアと強化ピストンが新採用され、内部メカニズムの強化が図られている。



従来のメカを一部リファイン

メッキコーティング
セクターギア

強化ピストン



ハンドガード下面に20mmレールと最前部にハンドストップ兼スリング・スウィベルを装備。左右側面にもオプションの20mmレール固定用スクリュー・ターミナルが設けられ拡張性が高い。

側面のジョイントを利用して複数のマガジンを連結可能なのもG36ならではの面白ポイントだ。オプションの470連射マガジン (手前) は抜群の火力! 50連スベアマガジン (奥) は「5.56mm実包が透けて見える造形」がリアルでカッコいい!

- G36C用50連スベアマガジン 3,080円
- G36C用470連射マガジン 3,960円



純正Li-Poバッテリー「7.4v 1,500mAh 35Cスタンダード」もしくは「ニッケル水素ミニSバッテリー」をハンドガード内にスッキリ収納。「PLUS SYSTEM (=FET回路)」はリアル再現されたガスピストンの側に配置されている。

ストックは完全に折り畳むとケースリフレクターでロックされる。ヒンジ部分も金属パーツで頑強に造られており安心。エジェクションポートを上手く避けるデザインで (実銃でも) そのまま発砲が可能!





月刊

THE GREEN BERET

vol.58

SPECIAL FORCES CIF COMPANIES

Part 6

文・イラスト/DJちゅう
写真/U.S.ARMY

特殊部隊CIF中隊特集パート6

1990年に遂に始動したCIF (Commander's In-Extremis Force) 中隊。設立当初は10th SFG C-1-10、1st SFG C-1-1、7th SFG C-3-7の3グループのみでしたが、1999年には3rd SFG B-2-3、5th SFG A-1-5と各グ

ループにCIF中隊が誕生します。90年代は実際に人質救出作戦に投入されて成果を上げ、それぞれの地域に駐留する対テロ部隊として期待されていました。しかし、2000年代に入るとアルカイダやタリバンなどのイスラム過激派による世界同時多発テ

ロが発生。米軍は新たなテロリズムとの戦いが始まり、CIFもそれに大きく関わることになります。今回のパート6では設立当初のCIFの構成と、JSOCとの連携、9.11以降のCIFの動向、そして中東で活動を始めた彼らの装備に注目してみましょう。

参考文献

jackmurphywrites.com 「SPECIAL FORCES TO DISBAND THE COMMANDERS-IN-EXTREMIS-FORCE (CIF) HIGH SIDE」
「Revenge on the CIF - How "The Haters" Cut Special Forces' Last Link To JSOC」、
ARSOF-HISTORY.ORG 「The Raid at Hazar Qadam」





DJちゅうの GEARHEADS JUNCTION

Japan Milsim Event 2024.03.16
MilsimLite #MilsimLite
in 関東 Vol.02

写真 / gearties (@gearties), KK (@kame20100505) 写真・文 / DJちゅう

GEARHEADS [ギアヘッズ]
熱狂的な装備フリーク—
JUNCTION [ジャンクション]
接合, 連接, 交差点または分岐点—

Japan Milsim Event
2024.03.16
MilsimLite in 関東 Vol.02
#MilsimLite





IF24

Iron Fist 24

島しょ防衛強化を図るために非常に重要な訓練がある。それが日米共同実動訓練「アイアンフィスト」だ。毎年必ず実施されており、この訓練を通じ日本版海兵隊と水陸機動団が創設された。ここでは「アイアンフィスト24」として今年行なわれた訓練の様をお伝えする!

金武ブルービーチへと上陸する海自LCAC。そこから下ろされている緑色の車輜は、米海兵隊の歩兵戦闘車であるLAV-25だ。25mm機関砲M242を主武装として、車内には3名の乗員に加え、6名の海兵隊員を乗せることができる。



日米共同実動訓練「アイアンフィスト」――。

日本語に訳すと“鉄拳”となり、何者にも屈せず立ち向かっていく強さを意味している。部内では英語表

記のIron Fistから頭文字を取り「IF」と呼んでいる。

2006年より毎年行なわれており、今年については「アイアンフィスト(IF)24」として、2月25日から3月

17日の間に実施された。日本側からは水陸機動団等、米側からは沖縄に駐留する第3海兵遠征軍等が参加した。

この訓練が開始されたきっかけは、

中国による覇権主義的の海洋進出により、日本南西諸島部が奪われる可能性が出てきたからだ。陸自創成期は、対ソ連を念頭に置いた北方の防衛力整備を急ぎ、九州沖縄エリアは二の

次とされた。それは沖縄本島以南には陸自部隊が配置されなかったことから窺い知ることが出来る。

2000年代に入り、いよいよ日本も南西諸島部の防衛力強化を図る必要

が出てきた。そのひとつとして、陸自にも米海兵隊のような水陸両用戦部隊を作ることを決めた。

2002年3月27日、西部方面隊直轄部隊として西部方面普通科連隊が新

編された。この部隊を水陸両用戦部隊とすることになったが、日本には着上陸戦のノウハウがない。そこで数々の実戦を戦い抜いて来た米海兵隊から教えを請うこととした。それ

が「IF」の始まりで、当初はカリフォルニア州にあるキャンプペンデルトン等、米本土で実施されていた。

まずは、装備を身に付けて泳ぐ着装泳やボート操法といった海兵隊に